

周作人詩話三

松岡俊裕

私には三人の恋人がいた、
彼女たちは知らなかったけれども。

彼女たちは自身気づかぬうちに私に多くのものを与えてくれた…

ある娘は私に恋することを教えてくれ、

ある娘は私に嫉妬することを教えてくれた。

私は彼女たち全てに感謝する、

私にこの苦くもあり甘くもある杯を与えてくれたことに感謝する。

彼女は嫁ぐ前に亡くなった、

彼女は嫁いでから亡くなった、

彼女はどこに流浪したのか分からない、

私はもう彼女を探す気はない。

私の心の中で育まれており、

恋人であつた三人の彼女はいまだ健在している。

彼女の写真は母の手元にあり、

私は敢えて会いに行く気はない。

二人の顔立ちは忘れた、

一人の朦朧たる姿だけが脳裏に残っている。

だが、この朦朧たる姿が最も私の心を引きつける。

記憶が薄れるほどに、

彼女のことが忘れられない。

(周作人「彼女たち」)

すでに記したように、光緒二十七年（一九〇一）一月二十五日

（以下旧暦）、兄の魯迅は故郷紹興での正月休暇を終えて遊学先の

南京（江蘇省省都）に向けて旅立った。周作人は杭州（浙江省省

都）の手前の西興（杭州と錢塘江を夾んで向き合っている鎮）まで

（魯迅を送り、その際集句（詞）「菩薩蛮 送夏劍生往秣」（本論集

前々号登載の「周作人詩話 二」参照）を作つてその旅立ちを見送

つたが、彼は更に当日の夜に、魯迅が前年に故郷で正月を迎えて南

京に戻つてから作つた別離の詩「別諸弟」三首（諸弟に別る）三

首。七絶）の韻字を使つて送別の詩「送夏劍生往白 步別諸弟三首

原韻」（送夏劍生の白に往くを送る 諸弟に別る三首の原韻を歩

む）三首を作り日記に書き記した（夜、七絶を三首作る。二月中

に寧「南京」に送ろうと思ふ）「同日付「周作人日記」。但し「周

作人日記」によれば、実際には一月二十八日に魯迅に宛てて發送し

ている）。

ちなみに、魯迅の「別諸弟」三首は次の通り。

謀生無奈日奔馳 生を謀りて奈んともする無く 日奔馳す

有弟偏教各別離 弟有りて 偏に各をして別離せしむ

最是令人凄絶処 最も是れ人をして凄絶ならしむる処

孤檠長夜雨來時 孤檠 長夜 雨來る時

還家未久又離家 家に還りて未だ久しからざるに 又家を離る
 日暮新愁分外加 日暮れて 新たなる愁ひ分外に加はる
 夾道万株楊柳樹 道を夾む 万株の楊柳樹
 望中都化斷腸花 望中 都断腸の花に化す

從來一別又經年 從來 一別すれば 又年を経
 万里長風送客船 万里の長風 客船を送る
 我有一言應記取 我に一言有り 應に記取すべし
 文章得失不由天 文章の得失は天に由らず

第一首の韻字は馳、離、時、韻は支韻（上平）。第二首の韻字は家、加、花、韻は麻韻（下平）。第三首の韻字は年、船、天、韻は先韻（下平）。

⑨ 送夏劍生往白 步別諸弟三首原韻（七絶。三首） 之江

查麓山人

一片征帆逐雁馳 一片の征帆 雁を逐ひて馳せ
 江干煙樹已離離 江干の煙樹 已に離離たり
 蒼茫獨立增惆悵 蒼茫のうちに独り立ち 惆悵増す
 却憶聯床話雨時 却って憶ふ 床を聯ねて雨を話す時を

「夏劍生」は、魯迅の号（前出）。「白」は、「白下」に同じ。もともと江蘇省江寧県の西北にあった城の名であり、唐代の武徳年間（六一八〜六二六）に金陵（今の南京）を改めて「白下」とした。

江寧（南京）を「白下」ともいう。ここは南京のこと。「之江」は、浙江省のこと（前出）。「查麓山人」は、周作人の号の一つ（前出）。「一片」は、ひとひら、一切れ。「征帆」は、遠方へ行く船、旅の船。ここは魯迅が乗っている船のこと。「干」は、岸辺。「江干」で岸辺、河岸の意。「煙樹」は、霧や靄が立ち籠めていてぼんやり見える木々。「離離」は、離れ離れになる様。ここは岸辺の靄（霧）に包まれた木々に遮られて魯迅の乗った船が見えなくなり、離れ離れになってしまったことをいう。「蒼茫」は、果てしなく広い様。「惆悵」は、悲しみ嘆くこと。「聯床」は、ベッドを並べること。「話雨」は、もともと友人が相集って語ることを言う（晩唐の詩人季商隱の七絶「夜雨 北に寄す」詩に「巴山の夜雨を話す」「友人が別後再び逢って巴山夜雨の昔を語る」なる句が見える）。両者を合わせた「聯床話雨」は、魯迅の「別諸弟」三首の第一首の結句「孤檠 長夜 雨來る時」同様に、明らかに宋の蘇軾、蘇轍兄弟の「夜雨対床」の故事（蘇軾が弟の蘇轍に与えた「辛丑十一月十九日、既に子由「蘇轍の字」と鄭州西門の外に別れ、馬上にて詩一篇を賦して之に寄す」詩の中に、「寒灯に相對して曠昔を記す 夜雨何れの時か蕭瑟たるを聴かん」の句があり、自註「嘗て夜雨対床の言有り、故に爾云ふ」が付されている）を踏まえている。ここは兄弟（魯迅、周作人、周建人）が紹興の自宅でベッドを並べて仲睦まじく旧事を語り合うという意味。

周作人は作詩日の日記に、李白の五言十六句詩「崔度の呉に還るを送る」中の「去影忽として見えず 躊躇するに日將に暮れんとす」の二句が、魯迅の乗った船を見送った時の状況に近いと記している。

小橋楊柳野人家 小橋 楊柳 野人の家
 酒人愁腸恨転加 酒愁腸に入り 恨み転加ふ
 芍薬不知離別苦 芍薬 離別の苦しみを知らず
 当階猶自発春花 階に当たりて 猶自ら春花を発す

「野人」は、一般の民、田舎者。作詩日（二月二十五日）の「周作人日記」によれば、起句は後に「時因遣悶過隣家」（時に遣悶するに因りて隣家に過ぐ）と改めた。「時」は、時折り、たまに。「遣悶」は、うさを晴らすこと。「過」は、訪れる。「隣家」は、恐らく周作人の属する紹興覆盆橋周氏の台門（屋敷）内に住む族人の家であろう。周作人自ら作詩日の日記に、この改変によって表現が「どうやら少しく穏やかになった」と記している。「愁腸」は、憂え悲しむ心、哀愁に満ちた心。「酒入愁腸」で、悩み事があつて余り酒が飲めないこと（成語）。「芍薬」は、春夏の交に咲く花で、「可離」とも言う。男女が相戯れて恩情を結ぶ時、又は別れる時に相手に贈る（芍薬之贈）。この花は、別れを意味し、見る人に別れの苦しみ、辛さを思い出させる花として知られる。「当」は、この面前で、ここで。

家食於今又一年 家食すること 今より 又 一年
 羨人破浪泛楼船 人の浪を破り楼船を泛ぶるを羨む
 自慚魚鹿終無就 自ら慚づ 魚鹿の終に就く無きを
 欲擬靈均問昊天 靈均に擬して昊天に問はんと欲す

「家食」は、仕官せず自宅に徒食すること。「人」は、魯迅のこと。「破浪」は、波を蹴立てる。「楼船」は、甲板に居室を設けた

船、矢倉のある船、二階造りの屋形船。「破浪泛楼船」は、「乗風破浪」（遠大な志があること。典故は「長風に乗り万里の浪を破る」）。「宋書」「宗愨伝」。ちなみに、魯迅が翌光緒二十八年（一九〇二）に日本に留学するに際して、江南陸師学堂（日本の陸軍士官学校に当たる。南京）付設の鐵路鉱務学堂の同級生胡韵仙が詠んだ送別詩の中にこの句が見える）と言う意味をも含む。「就く」は、捉えること。「魚鹿に就く」は、この場合、学業が成就して秀才の試験に及第すること。「靈均」は、東周の楚國の三閭大夫屈原の号。「昊天」は、天に同じ。「問昊天」は、屈原の「天問」（「楚辭」中の一篇。宇宙人生間の出来事並びに説話について疑問を設けて天に問いかけたもの）に基づく。周作人は自分の学業がなかなか成就しない理由を天に問うたのである。

この詩は、魯迅との別れを悲しむ一方で、魯迅が大志を抱いて異郷で学問に励んでいるのに比して、自分の学業がなかなか成就しないことを恥じており、この詩によっても前年の秀才試験の成績が芳しくなかった（県考は第二回第三十九名、府考は第三回第三十四名）ことを周作人が深刻に受け止めていたことが分かる。この成績では、前々年に引き続き、この年も院考（秀才試験の最終試験）に及第して秀才になれる見込みはなかった。

訳 夏剣生の白に行くのを送る 「諸弟に別る」三首の原韻を踏む

一隻の遠くへ行く船が 雁を追って進んで行く
 岸辺の霧に包まれた木々に遮られて船の姿が消え 我々は離れ
 離れになってしまった

果てしなく広がる大地に一人佇たぐんでいると、いよいよ悲しみが募り嘆きが増したが

兄弟でベッドを並べて旧事を語り合ったことを思い出し、やや気を取り直した

時折り憂さを晴らしに隣家を訪れたが

愁いを帯びた心はなかなか酒を受けつけず、別れを恨む気持ちが強まった

見る人をして別れの辛さを思い出させる芍薬は、私の辛い気持ちも知らないで

今もなお階段の前で自ら春の花を咲かせている

私は今から更に一年仕官もせずに家で徒食することになった

兄が壮志を抱き浪を蹴立てて進む屋形船に乗って行くのが羨ましい

学業が成就して秀才となれない自分が恥ずかしい
屈原こげんに倣なまって天にその理由を尋ねてみよう

「送夏剣生往白」詩を詠んだ翌々日（一月二十七日）、周作人は弟の周建人と共に紹興城内の観音橋（興福橋のこと。灌英橋とも言う。発音が似通っている）地籍（会稽県）にある趙氏の庭園（趙園）⁽²⁾に遊び、その時の様子を当日の日記に次のように書き誌している。

晴。午前、三弟「周建人」と一緒に長膏花園行って遊んだ。

園は甚だ小さく、花も少ない。僅かに山茶「椿」、黄楊「ヒメツ

ゲ」、牡丹、月季「庚申バラ」がそれぞれ数株あるにすぎない。繼いで観音橋に行って遊んだ。趙氏の園内はすっかり空き地になっている。だが、椽閣はないものの、その壊れた跡は今も残っている。池、沼、築山はなかなか見事であり、青草が池を覆っている。蒼龍「伝説上の凶神で、東方（左側）に配される」が踞すわっている石が割れ瓦や崩れた垣根の間からころうじて見えた。どうやら遺跡のようであった。園が立派であった時のことを想像してみらるに、たぶん洛陽の名園に劣らぬものであったに違いない。

この日の午後、更に曲池（紹興府城内会稽県治）に遊んで帰宅した周作人を吉報が待ち受けていた。それは科挙不正事件を起こして暫監候（執行猶予付き死刑判決）の判決を受け杭州府獄に収監されていた祖父の介安公（周福清）からの、すでに釈放を許可するとう皇帝の命令を受け取っており一月末ないしは二月初めには帰宅できるといふ内容の手紙であった。この知らせに周作人が大いに喜んだことは言うまでもない。当日の日記に「拝読するに、喜びに堪えない」と記している。介安公からの手紙を受け取った翌々日（一月二十九日）、今度は南京の魯迅から介安公の釈放を求める刑部尚書薛允升の上奏文の写しが届いた。

吉報があった翌日（二月一日）に作ったのが、三日前に趙園に遊んだ時のことを詠んだ七律「游趙園有感 園在灌英橋」（趙園に遊びて感有り 園は灌英橋に在り）である。

⑩ 游趙園有感 園在灌英橋（七律） 汝南介孫氏

那溪風暖日初長 那溪風暖かく、日初めて長し

醉後登臨宿願償	醉後登臨し	宿願償ふ
松檟欹斜竄鼯鼠	松檟欹斜し	鼯鼠竄る
亭台廢壞牧羊	亭台廢壞し	牛羊を牧す
野花衰草眠荒徑	野花 衰草	荒徑に眠り
斷瓦殘垣臥夕陽	斷瓦 殘垣	夕陽に臥す
嘆息滄桑頻變易	滄桑の頻りに	變易するを嘆息す
倚欄憑眺一神傷	欄に倚りて憑眺し	一神傷む

「汝南」は、周作人の属する覆盆橋周氏を含む紹興魚化橋周氏の先祖と言われる宋の性理学者周敦頤（濂溪）の家が汝南（河南省汝寧府）族周氏の一派宮道（湖南省永州府）族に属していたことによる。署名の「介孫氏」は介孚公の孫という意味。このことから、当時周作人が学問の師として介孚公を尊敬していたことが分かる。「那」は、そ（の）と読み、趙園を指す。「初」は、くしたばかり、くになったばかり。「登臨」は、高みに登って下を眺めること。先に引いた日記中に「樓閣はないもの、池、沼、築山はなかなか見事であり」とあり、登ったのは恐らく築山であろう。「宿願」は、第二句に「予、素より趙園を慕ふ。しばしば一游せんと欲するも果たさず」という割註が施されていることから分かるように、趙園に遊ぶこと。「松檟」は、松とヒサギ、墓上の木と言われる。「欹斜」は、傾くこと。「竄」は、隠れること。「鼯鼠」は、ムササビ。「亭台」は、あづまや。「野花」は、野に咲く花。「衰草」は、枯れかかった草。「荒徑」は、荒れ果てた小道。「殘垣」は、崩れた垣根。「滄桑」は、滄海桑田の略。「滄桑之變」で、世の中の変遷の激しいことの喩え。「倚」は、もたれる、寄りかかる、の意。「憑眺」は、高い所に身を置いて眺めること。「一神傷」は「神傷」に同じで、

心の中だけで悲しみ傷むこと。

韻字は、長、償、羊、陽、傷、韻は陽韻（下平）。

訳 趙園に遊んでの感懐 園は灌英橋にある

趙園の小川に吹く風は暖かい 日は長くなり始めたばかりだ
酔ってから園内の高みに登った 長年の夢がやっと叶ったのだ
松とヒサギの木は傾き倒れ ムササビがその陰に潜んでいる
あづまやは壊れ 牛や羊が放たれている

野の花や枯れかかった草が 荒れ果てた小道に眠りこけている
割れ瓦と崩れた垣根が 夕日を浴びて横たわっている

世の中は余りにも変わりすぎる

欄干に凭れて下を眺めながら 心から悲しみ傷んだ

趙園の荒廃振りを見た周作人は、さぞかし祖國中国と自家の没落のことに思いを致したに違いない。

さて、『周作人日記』によれば、周作人は二月十二日の早朝、夢の中で七絶「嘲蝨」（蝨を嘲る）詩の後半二句を詠み、夢から醒めた後、前半二句を詠んで完成させ、同月十五日に日記に書き誌した。詩の前には、「辛丑の春」「二月」「十二日五更」「午前四時」、夢の中で後半の二句を得、夢が醒めてからもはつきり覚えていたので、補って完成させた。蝨を嘲ることによって、自らをも嘲ったのである」と記されており、詩の後には「辛丑卯月」「四月」「十五日卓午」「正午」、柑酒醜醜生、小猓那の来服軒にて書す」と記されている。

⑩ 嘲 蝨 (七絶)

躍劍生

縹帙細囊任穴居 縹帙 細囊 穴居するに任す

一叢宛委寄微軀 一叢 宛委して 微軀を寄す

笑他生死書叢裏 他の生死 書叢の裏にあるを笑ふ

咀得書中旨味無 書中を咀み得ても 旨味無し

「蝨」は、本の紙魚。本の山の中に蹲って勉強に明けくれている周作人自身を紙魚に喩えている。周作人に蝨籠山人と言う号名と蝨籠子と言う筆名のあることはすでに触れた。署名の「躍劍生」は、周作人の号の一つ(前出)。「縹」は、薄藍色。「縹帙」で、薄藍色の本包み、転じて書物のことを言う。「細」は、浅黄色。「細囊」で、浅黄色の本包み、転じて書物のことを言う。「一叢」は、ひと群れ、ひと集まり。「宛委」は、曲がりくねること。「他」は、蝨のこと。結句は後に「食得神仙字也無」(神仙を食し得るに字も無し)と改め、周作人自らこれも「妙」であると記している(『周作人日記』による)。

韻字は、驅、無、韻は虞韻(上平)。

本詩は、紙魚が紙を食べるように、本の山の中に蹲って秀才試験を受験するための勉強に取り組んでいる自分を嘲ったものである。

本詩は、周作人が当時すでに科擧の道に疑問を抱いていたことを示している。

訳 紙魚を嘲る

紙魚が思うままに本の中に穴を作って住みついている

ひと群れの紙魚が 曲がりくねりながら その小さな体を寄せ
ている

その生死が本の中に限られているのは実に可笑しい
本の中を食べた所で さして旨くもないのに

翌る二月十三日、周作人は杭州府獄に収監されている介孚公から、釈放を許可する通知文がすでに杭州府に届いており、日限を切って帰郷できると言う内容の同月十一日付の手紙を受け取り、二月十九日には、同じく介孚公から翌々日(二十一日)に該地を発つて紹興に帰るので船を雇って西興まで迎えに来るようにと言う内容の同月十六日付の手紙を受け取った(以上、二月十三日、十九日付『周作人日記』による)。

周作人は翌る二十日の夕刻に自宅を出発し、西郭門を経て城外に出たが、「春雨がザアザアと降り、船の篷を激しく打ち続けたことと、行き交う船が多く、舷が擦れ合う音が絶えなかったことにより、なかなか寝つかれなかった」ため「着物を羽織って起き、『危言』を読んで絶句を二首口づさみ」(以上、二月二十付『周作人日記』による)、同日の日記に誌した(七絶「舟中閑」「危言」一篇口占二絶)。「舟中にて」「危言」一篇を閲し 二絶を口占す」。

⑪ 舟中閑「危言」一篇 口占二絶(七絶、五絶、二首)

東風送雨夜蕭蕭 東風 雨を送り 夜 蕭蕭たり
 獨倚篷窗影寂寥 独り篷に倚り 窗影 寂寥たり
 惟有愁人長不寐 惟だ愁人有るのみ 長らく寐す
 挑灯危坐読離騷 灯を挑げて危坐し 離騷を読む

「危言」は、清末の湯震著。光緒十六年（一八九〇）刊。「自序」（同年六月）。光緒二十一年（一八九五）石印本がある。この年（光緒二十七年）の七月十八日付『周作人日記』に「午前、墨潤堂『紹興』に行き湯氏の『危言』を一冊買う。銀貨で十二銭した」とあり、また十二月一日の『周作人日記』に「『危言』を少しく読む」と見える。「口占」は、口づさんで詩を詠むこと。「東風」は、春風。「蕭蕭」は、風や雨の物寂しい音の形容。「窗影」は、窓から見える夜景。「愁人」は、憂いを抱いている人、周作人のこと。「挑灯」は、灯心を掻き立てること。「危坐」は、端座すること。「離騷」は、『楚辞』中の一篇で、屈原作。楚に仕えて忠誠を尽くしたにも拘わらず讒言に逢って楚王から疎んじられた屈原が憂愁沈思して作った憂国の作品であり、『危言』の内容と通い合うものがある。同時代に書かれた「危言」を、内容に通いものがある古代の名作「離騷」に代えることによって、作品は形式的にも内容的にも「雅び」なものとなったと言えよう。

韻字は、蕭、寥、騷、韻は蕭韻（下平。蕭、寥）と豪韻（下平。騷）。いわゆる破格体である。

風雨暗孤灯 風雨 孤灯暗し
 倚篷且曲肱 篷に倚りて 且つ肱を曲ぐ
 扁舟何處泊 扁舟 何れの處にか泊らん
 今夜宿西興 今夜は西興に宿る

「孤灯」は、一つの灯。「扁舟」は、小舟。韻字は、灯、肱、興、韻は蒸韻（下平）。

訳 船の中で「危言」一篇を読み 絶句二首を口づさんで作る

今夜 春風が雨を従えて 吹きすさぶ
 一人篷に凭れ 窓外の寂しき夜景を眺む
 船中の孤人は いっかな寝もやらずして
 灯心を掻き立て 端座して 離騷を読む

風雨の中の孤灯 暗闇の中
 肱をついて 篷にもたれる
 小船は 何処に泊まるのか
 今夜は かの西興に泊まる

さて、この年の四月二十日、周作人はその日記に「惜花四律 步藏春園主人元韻」（花を惜しむ四律 藏春園主人の元韻を歩む）。署名漢真將軍後裔」と本歌の「惜花四律」（署名湘洲藏春主人）を書き誌している（末尾に「辛丑初夏二十日午前、春然齋主周恢、小郎邪の柑酒聽鸚軒に於て録す」と記されている）。

人民文学出版社の新版『魯迅全集』（一九八一年）の注によれば、本歌の作者湘洲（湖南省長沙）の藏春（園）主人とは、林步青のこと。湖南長沙の人で、当時上海に寓居していた（詳細は不明）。周作人の回想によれば、本歌の「惜花四律」は釈放された介孚公が持ち帰った『海上文社日録』に載ったと言う（海上は上海のこと）。

『海上文社日録』（または『海上文社日報』）の名は『周作人日記』に散見しており、以下に引用することにする。

・「午後、『海上文社日報』録」及び「同声集」を読む。（光緒

二十七年「一九〇一」二月二十四日)

・「昼、小高歩「小鼻埠」の魯延孫表兄「後出」が来る。昼食に引き留める。余、「同声集」一冊を贈る。彼は「海上文社日報「録」と「遊戯報」を各々一束、それに「覚民報」を二冊借りて午後帰った。」(同年二月二十八日)

・「予、三弟「周建人」に託して魯延孫に手紙を寄せ、「申報」の貸出と「文社日報「録」」の返却をお願いした。」(同年三月十九日)

・「延孫宛ての手紙を書き、「拳匪紀交百咏」乙本と「遊戯報」第二冊乙本の贈呈を申し出るとともに、二、三月分の「申報」の貸出と「文社日報「録」」の返却をお願いした。」(同年三月二十六日)

・「予、魯延孫から」「申報」を三十八枚と付録を九枚受取り、「魯延孫が予に」「海上文社日報「録」」等を一括り返した。」(同年四月二日)

・「午後、「文社日報「録」」を読む。」(同年四月三日)

・「夜、海上文社宛ての手紙を書き、灯謎、詩詞、小説等を同封したが、未だ送らず。」(同年四月六日)

・「再び人力車で陸師「すでに記したように魯迅が南京の江南陸師学堂付属の鐵路鉅務学堂で学んでいた」に戻り「略」、暫く休んでから堂「当時周作人は同じく南京の江南水師学堂(日本の海軍兵学校に当たる)で学んでいた」に帰った。「魯迅の所から」「文社日報「録」」二冊、「小郎買」十二冊、筆一本……、夜読み終えて直ぐ眠りについた。」(同年十二月二十六日)

・「夜、趙吉士の「焚塵寄」を読む。胡子樵「韵仙」兄が「文社日報「録」」を一組十冊借りに来る。」(光緒二十八年「一九〇二

一月十六日)

・「夜、「海上文社日報」二十六本を二冊に製本する。「陳蕪堂詩抄」及び「文社録」を読む。中に日本人の詩があり、なかなかの出来映えである。」(同年一月十九日)

・「夜、「文社日報」を読み、戯れに詩鐘を一つ作った。左に記すことにする。「陸龜蒙・徐夕に穀を聞く・花鴨鳴く時三月の暮木鷄の声の裏一冬の徐」(同年一月二十七日)

・「文社日報」を読む。「眉韻樓外史」(孫同康、昭文人。最近の翰林)があり、アヘンを頌える集句一律がなかなかよくできており、左に記すことにする。「略」(同年一月二十八日)

・「夜、韵「胡韵仙」兄の許を訪れ、雑談する。彼は予から「海上文社日報」を一冊借りた。」(同年二月十六日)

・「夜、「文社報「録」」を読む。」(同年三月二十五日)

確かに「海上文社日報」の名は介孚公の二日後に始めて日記に現われており、周作人の言うように介孚公が「海上文社日報」を持ち帰った可能性が高いが、少しく疑義もあり、この点については後に作詩時期の問題を扱う際に改めて取り上げることにする。

ちなみに、蔵春園主人には著作に「惜花酬唱集」(「海上文社日報」誌に掲載された酬詩をまとめたものであろうか)があり、該集の名が同年六月五日の日記に見える(「人を筆飛術に遣わして江南陸師「魯迅」宛ての、詩鐘「鶴和集」と邗江「漕河」のこと。江都蘇州から淮安に至るもの」の蔵春主人の「惜花酬唱集」の代理購入を依頼する手紙を出させた)。

「惜花四律 步蔵春園主人元韻」は、周作人が「魯迅全集補遺続編」(一九五二年三月、上海出版)の編者唐弢に魯迅の逸作の提供

を求められた際に提出したものであり、しかも解放後に書いた「魯迅の故家」第二部「園の外」三十一「惜花詩」と「魯迅の小説中の人物」に収められている「旧日記中の魯迅」の「辛丑二」（いづれもすでに註(3)で触れた）でも魯迅の作品としていることから、長い間魯迅の作品であると考えられてきた。例えば人民文学出版社の旧版「魯迅全集」（一九五七年）と新版「魯迅全集」、それに新版「魯迅全集」の日本語翻訳版「魯迅全集」十「集外集拾遺補編」はいずれも魯迅の作であるとしている。しかし文化大革命が終焉した後、「周作人日記」の閲覧や利用が許されるとともに、研究誌で原文が紹介されるようになり、その結果一部の研究者によって周作人創作説が唱えられるようになった。管見の限りでは、張自強氏の「惜花四律」の作者及び創作時期と原因⁽⁴⁾だけが依然として魯迅の作であるとしている。張氏の論証法はやや強引で牽強附会の嫌いがあり、同意できない。筆者はこの作品には魯迅の手が少なからず入っているものの、他の同様に魯迅の手が入っている作品と同じく、この詩も基本的にはやはり周作人の作品と見なすべきだと考える。

ここで、周作人の「惜花四律 步藏春園主人元韻」を巡る残った問題はひとまず後に回すことにして、本歌の「惜花四律」と周作人の「惜花四律 步藏春園主人元韻」を見てみることにする。

花を惜しむ 四律（七律。四首） 湘州藏春主人

夜来風雨苦相禁 夜来の風雨 苦しく禁はる
 早起欣看画閣晴 早起きて 画閣の晴るるを欣び見る
 軟白輕黄無限思 軟白輕黄 無限の思ひ
 嫣紅柔綠可憐生 嫣紅柔綠 生を憐はれむべし

浅深秀媚如含恨 浅深なる秀媚 恨みを含むが如し
 濃淡豊姿若有情 濃淡なる豊姿 情け有るが若し
 鸚鵡簾前能解事 鸚鵡 簾前にて 能く事を解す
 呼僅漑漑報声声 僅を呼びて 漑漑せしむれば 報ゆるに声声なり

東皇醞釀半開時 東皇醞釀し 半ば開く時
 彳亍行来有所思 彳亍として行き来し 思ふ所有り

清影月移猶愛護 清影 月移るも 猶愛護す
 修芽風動費扶持 修芽 風動きて 扶持を費やす

參天壅漢窺雲壑 參天の壅漢 雲壑を窺ふ
 大地陽春泛酒卮 大地の陽春 酒卮を泛ぶ

屬付小鬟須着意 小鬟に屬付みて 須らく着意せしむべし
 莫教偷折最新枝 最新の枝を偷み折らしむるなかれ

枝頭簇簇暗香飄 枝頭簇簇として 暗香飄ふ
 小雨如酥分外嬌 小雨酥の如く 分外に嬌し

休使狂蜂傷嫩蕊 狂蜂をして 嫩心を傷つけしむる休かれ
 不教浪蝶繞柔條 浪蝶をして 柔条を繞らさしめざれ

青埃碧漢三千界 青埃碧漢の三千界
 綠意紅情廿四橋 綠意紅情の廿四橋

願祝十分春永駐 十分の春の永に駐まるを願ひ祝る
 封媵珍重莫輕揺 媵しきものを封じて 珍重し 軽々しく揺する莫かれ

千紅万紫各爭妍 千紅万紫 各 妍を争ふ

好鳥 人を瞞して葉底に眠る
 清衛亦難堪恨海 清衛も亦恨海に堪へ難き
 鳩皇不肯補情天 鳩皇は肯て情天を補はず
 金鈴深護窺憔悴 金鈴 深く護り 窺りに憔悴す
 玉樹徵歌自適然 玉樹 歌を徵し 自ら適然なり
 三十六宮春日麗 三十六宮 春日麗し
 滿城風雨艶無辺 滿城の風雨 艶しきこと無辺なり

第一首の韻字は、禁、晴、生、情、声、韻は、庚韻（下平）。第二首の韻字は、時、思、持、扈、枝、韻は、支韻（上平）。第三首の韻字は、飄、嬌、條、橋、揺、韻は、蕭韻（下平）。第四首の韻字は、妍、眠、天、然、辺、韻は、先韻（下平）。

以下、「惜花四律 步藏春園主人元韻」の読みと訳は学習研究社版「魯迅全集」十「集外集拾遺補編」所収の読みと訳を参考にし、語釈は人民文学出版社の新版「魯迅全集」の注及び学習研究社版「魯迅全集」の訳注を参考にした。

⑬ 惜花四律 步藏春園主人元韻（七律。四首） 漢真將軍

後裔

鳥啼鈴語夢常禁 鳥は啼き 鈴は語り 夢常に禁る
 閑立花陰盼嫩晴 閑かに花陰に立ちて 嫩晴を盼む
 恍目飛紅隨蝶舞 目を恍ましむる飛紅は 蝶に随ひて舞ふ
 関心茸碧繞階生 心に関かる茸碧は 階を繞りて生ず
 天於絶代偏多妬 天は絶代に於て 偏へに妬み多し
 時至將離倍有情 時は將離に至りて 倍々情け有り

最是令人愁不解 最も是れ 人をして愁へて解けざらしむ
 四檐疏雨送秋声 四檐の疏雨 秋声を送る

筆名の「漢真將軍後裔」には、当時の、祖国がまさに滅びようとしている危機的状況下に於ける作者の滅満興漢の民族主義と尚武主義が反映しているものと考えられる。「鈴語」は、花を啄みに来る鳥を追い払うために繋がれた鈴が鳴る、と言う意味。「嫩晴」は、雨が晴れ上がったばかりの空を言う。宋の楊万里の「春暖かく 郡圃に散策す」詩に「細草欣欣として嫩晴を賀す」と言う句が見える。「恍目」は、見る人を悲しませる、と言う意味。「飛紅」は、風に散って舞う赤い花。「関心」は、気になる、気にかかる、と言う意味。「茸碧」は、芽生え始めた緑色の細い草のこと。「於」は、くに対して。「絶代」は、もともと絶世の美女のことを言う。ここは綺麗な花のこと。「將離」は、晩春から初夏にかけて咲く芍薬の異名。芍薬は別離の時に去り行く人に贈る花。「情」は、風情のこと。この句には春が過ぎ行くのを惜しむ気持が詠み込まれている。「四檐」は、家の四方の軒。「疏雨」は、疏らに降る小雨の別名。「秋声」は、秋の気配、様子。

この詩を記録した日の日記によれば、この第一首の後に「都六先生「周作人の別号。命名の由来は不明」原作。夏剣生添削。圈点は悉く夏剣生に従って改めた。」「第一首の」第一句は原作、第二聯「第三句と第四句」は原作、「茸碧」はもともと「新緑」に作る「つまり茸碧」の一語のみ原作でないということ、「末聯」第七句と第八句」は原作、「不解」はもともと「絶處」「険しい場所」に作る「つまり「不解」だけは原作でないということ、末句は成語。

第一」と記されている。要するに第一首全八句のうち、第二句、第五句、第六句の三句と二つの語句（合わせて二分の一強）が魯迅が新たに作ったものと言うことになる。

劇憐常逐柳綿飄 劇しく憐れむ 常に柳綿を逐ひて飄ふを
 金屋何時貯阿嬌 金屋 何れの時か 阿嬌を貯へん
 微雨欲來動挿棘 微雨 来らんと欲して 勦ろに棘を挿す
 薰風有意不鳴條 薰風 意有りて 條を鳴らさず
 莫教夕照催長笛 夕照をして長笛を催さしむること莫かれ
 且踏春陽過板橋 且く春陽を踏みて 板橋を過らん
 只恐新秋掃塞雁 只恐る 新秋に塞雁の掃るを
 蘭纓載酒樂輕搖 蘭纓 酒を乗せて 樂輕やかに揺く

「金屋」は、黄金で飾った家屋のこと。立派な家屋の喩えとして用いられる。「阿嬌」は、前漢の武帝の皇后陳氏の名。「漢書」の著者として知られる後漢の班固の作と言われる。「漢武故事」によれば、武帝の幼年時代に、長公主（阿嬌）が彼に戯れて「阿嬌は綺麗ですか」と問うと、武帝は笑いながら「綺麗です。もし阿嬌を妻にできたら、黄金で飾った立派な家を立てて住まわせなければなりません」と答えたと言う。「微雨」は、小雨のこと。「有意」は、故意にの意味。「不鳴條」は、枝に吹きつけて鳴らさない、と言う意味。「薰風有意不鳴條」で、花が散らないよう、ことさら花の着いている枝に吹きつけて鳴らさない、と意図する。「催」は、促す、せき立てる。「長笛」は、長い横笛、賦名（後漢の馬融作）。ここは笛の古曲「梅花落」の音のこと。「梅花落」の音が鳴り響くと梅の花が散ってしまうと言うわけである。「塞雁」は、辺境の雁のこと。「蘭

纓」は、木蘭の木で作った美しい小船。

この詩を記録した日の日記によれば、この第二首の後に「第二。首句は原作、第二聯「第三句と第四句」は原作」と記されている。要するに第二首全八句のうち、第二句、第五句、第六句、第七句、第八句の五句（二分の一強）が魯迅が新たに作ったものと言うことになる。

細雨輕寒二月時 細霰 輕寒 二月の時
 不緣紅豆始相思 紅豆に縁らずして 始めて相思ふ
 墮牕印屐增惆悵 牕に墮ち 屐に印されて 惆悵増す
 挿竹編籬好護持 竹を挿し 籬を編みて 好く護持す
 慰我素心香襲袖 我を慰めて 素心の香り 袖を襲ふ
 撩人藍尾酒盈卮 人に撩みて 藍尾酒卮に盈つ
 奈何無頼春風至 奈何せん 無頼の春風至るを
 深院茶靡已滿枝 深院の茶靡は 已に枝に満つ

「細雨」は、小雨。「輕寒」は、薄ら寒いこと。「紅豆」は、異名を相思子と言う。秋に小花が咲き、赤い豌豆程の大きさの実を着ける植物。ここは花に恋させてくれるものとして使われている。「相思」は、互いに思うと言う意味ではなく、相手（花）を思うと言う意味。「惆悵」は、悲しみ嘆くこと。「素心」は、素心蘭のこと。秋に白色の香りのある花を咲かせる。「撩」は、挑むこと、仕掛けること。「藍尾」は、藍尾酒（禁尾酒とも言う）のことで、酒席に於て末席の者が飲む酒。「卮」は、盃。「深院」は、奥庭。「茶靡」は、初夏に香りのある黄色または白色の花が咲く植物。その色が茶靡（濁り酒）に似ていることによる。

この詩を記録した日の日記によれば、この第三首の後にはただ「第三」と記されているだけであり、全て周作人の原作のままであることが分かる。

繁英繞句競呈妍	繁英	句を繞り	妍を呈するを競ふ
葉底閑看蛺蝶眠	葉底	閑かに看る	蛺蝶の眠るを
室外獨留滋卉地	室外	獨り	卉の滋る地に留まる
年來幸得養花天	年來	幸ひにも花を養ふ	天を得し
文禽共惜春將去	文禽	共に春の將に去らんとするを惜しむ	
秀野欣逢紅欲然	秀野	紅の燃えんと欲するに欣びて逢ふ	
戲仿唐宮護佳種	戲れに唐宮の佳種を護るに仿ふ		
金鈴輕縮赤蘭邊	金鈴	輕やかに縮ぐ	赤蘭の邊

「繁英」は、繁つた花。「句」は、(郊外の)田畑。「呈妍」は、美しさを表わすこと。「葉底」は、葉の下、葉陰。「蛺蝶」は、アゲハ蝶。「卉」は、草花のこと。「年來」は、数年来、と言う意味。「天」は、天氣、天候。「文禽」は、文禽鳥(雉)のこと。「秀野」は、花の咲く美しい春の野。「唐宮」は、唐代の宮殿のこと。「佳種」は、美しく優れた花のこと。「縮」は、繋ぐこと。「赤蘭」は、赤い欄干。

この詩を記録した日の日記によれば、第三首同様に、この第四首の後にもただ「第四」と記されているだけであり、全て周作人の原作のままであることが分かる。

全体としては、全三十二句中の八句余り(四分の一強)が魯迅が新たに作ったものであり、前述したようにこの詩は基本的に周作人の詩と見なすべきである。

この「惜花四律 步藏春園主人元韻」詩を巡っては、なぜ周作人は自分が創作した作品を魯迅のものであるとしたのかという問題と、創作の時期はいつなのかという問題がある。

周作人は一体いかなる理由があって自作を魯迅の作としたのか。魯迅の手が入っているものの、改作はすでに見たように一部にすぎず、全面的な改訂ではない。また周作人自身が「魯迅の故家」第二部「園の内外」三十一「惜花詩」でも述べているように、確かに改訂によって出来映えのよいものにはなったが(魯迅の改訂の方が優れていると考えたからこそ周作人は魯迅の改訂を受け入れたのであろう)、そのことが直ちに自作を魯迅の作とすることにはならない。兄弟関係が良好であった時期(一九二三年以前)には筆名の貸し借りはあったが、それ以降は全くない。そこで考えられるのが、魯迅と魯迅を賛美する人たちに對する風刺であり、魯迅のことは自分が一番よく知っているという自負である。自身の原作をそのまま紹介せずに魯迅の手の入ったものを紹介したのも、周作人の自分が魯迅のことを最もよく知っているという自負であり、また恥じらいでもあったと考えられる。或いは実は未だ決裂以前の兄弟の良好な関係を密かに顕彰しかつ兄弟の仲違いを惜しもうとする意図もあったのかも知れないが、いずれにせよ結局のところ現時点では真相はよく分からないと言ふより他ない。

創作の時期については、周作人は「魯迅の故家」第二部「園の内外」三十一「惜花詩」の中でこの年の春に作ったと書いているが、人民文学出版社の新版「魯迅全集」の注釈は周作人の言い方を無視して同年の初夏であるとしている。恐らくこの詩が記録されたのが同年の四月二十日であることからそのように推察したのであろう。この新版「魯迅全集」の注釈の初夏説に對して、日本の学習研究社

の翻訳版『魯迅全集』所収の「惜花四律 步湘州藏春園主人元韻」の訳注者である佐藤保氏は、同年三月二日の『周作人日記』に「長兄『魯迅』の二十六日の手紙並びに『惜花詩』四首を受け取る」とあるところから、その前月（孟春つまり二月）であるとしている。第三首の第一句に「二月時」とあることから分かるように、これは明らかに佐藤氏の二月創作説が正しい。周作人は正に春の真つ盛り時にこの詩を作ったのである。

では二月中のいつ頃のことなのであろうか。先に挙げた周作人の回想の中にある、『海上文社日録』が介孚公が持ち帰ったという言い方に基づけば、作詩時期は介孚公の帰郷日である二月二十二日以降ということになる。そして、翌二十三日の『周作人日記』に「祖父のために書籍を整理した」とあることから、この日が作詩時期の上限日ということになる。もう一つ作詩日を擬定する上で手がかりを与えてくれるのが、これもすでに先に挙げた三月二日の『周作人日記』の記述（「長兄の二十六日の手紙並びに『惜花詩』四首を受け取る」）である。『周作人日記』によれば、当時南京の魯迅が出した手紙が紹興の周作人の手元に届くまでに要する日数は、短くて六日長くて十一日であり、六日が一番多い（手紙を書いた日に発送するとは限らないが、確認できないため、ここでは当日中に発送したものと見なす）。逆に紹興の周作人が出した手紙が南京の魯迅の手元に届くまでに何日かかるかは記載がないが、これも六日から十一日の間とみてよいであろう。従って仮に魯迅が周作人宛ての手紙を書いた二月二十六日に周作人からの手紙を受け取ったとすると、周作人は十五日から二十日の間に手紙を魯迅宛てに発送したということになり、従って作詩日は二月二十日以前ということになる。先に示した作詩の上限日二月二十三日と明らかに矛盾する。これは恐ら

く周作人の記述の間違いであり、『海上文社日録』は介孚公が持ち帰ったのではなく、すでに別途二月二十日前に入手していたか、藏春園主人の「惜花四律」は『海上文社日録』以外の雑誌に載ったか、のいずれかであろう。周作人の記述は記憶によるものではなく、自身の当時の日記を見ての推測であり、その推測が誤っていたことになる。

訳 花を惜しむ 律詩四首 藏春園主人の元韻を踏む

夢の中で鳥の鳴き声と鳥を追い立てる鈴の音を聞く
静かに花陰に立って雨が上がったばかりの空を見る
見るも悲しく散り飛ぶ赤い花は蝶に従って舞上がる
いと美しい緑の若草は階段の回わりに芽生え始めた
かの天帝は絶世の美花に対してはひたすら嫉妬深く
芍薬の花の時期ともなればいよいよ風情は暮りゆく
この世の中で最も人を愁え傷ましめるものと言えは
軒下に滴り落ちる小雨の音に秋の気配が漂うことか

散る花の常に柳綿の後を追いて漂うことの哀れさよ
何時になつたら金屋にこの美花を住まわせられよう
今にも小雨の降りそな気配棘を挿して護ってやらん
薫る風もいたわりて枝に吹きつけて鳴らしもしない
赤い夕日に梅花落の笛の音を吹かせるのは願い下げ
ここ暫くは春の日を身に浴びて板橋を渡ろうと思う
辺境から雁が帰って秋が訪れ花が散ることを恐れる
お花見に木蘭の舟に酒を乗せて權さばきも軽やかに

しとしととこぬか雨の降り続く薄ら寒い二月の時に
紅豆なんぞに頼らずとも美しい花に恋してしまつた
傷ましいかな梅しんぼに散り落ち木靴に踏まれる美しき花
竹を挿し生け垣で囲んできちんと護つてやりたいな
素心蘭の香りが私の袖を襲つて私を慰めてくれる
おまけに人の心を唆して仕舞いのお酒を盃に満たす
避けられないのは春風が容赦もなく吹き荒れること
奥庭の茶藤の枝には今は盛りと花が咲き誇っている

田畑の回りに花咲き乱れ互いに美しさを競っている
ふと葉陰を見やれば蝶がひたすら眠りこけているよ
部屋の外に多くの草花の咲き乱れる地に独り佇む私
この数年来幸いにも花を育てる天候に恵まれ続けた
文禽鳥が私と共に春の去り行くのを惜しみ鳴いてる
美しい春の野に赤く咲く花を見つけることの楽しさ
戯れに唐の宮殿で美しい花を護つた故事にならつて
赤い欄干にかわいい金の鈴をそつと結びつけてみた

周作人は、この年の八月九日に魯迅がかつて学んでいた南京の江
南水師学堂の額外生（定員外の学生）試験を受け、補欠の第一名と
して採用され（全体では第二名）、九月一日から始まつた授業に参
加した。正式の学生に採用されるのは同年の十二月十三日のこと
である。

この年の大晦日の十二月二十九日、周作人は七言絶句を二首詠ん
で当日の日記に書き誌した（「聴隣家爆竹、恍似故郷、醉嘆二絶」
「隣家の爆竹の音を聴くに、恍ら故郷に似たり、酔ひて絶句二首を

嘆ぶ[1]）。

⑭ 聴隣家爆竹 恍似故郷 醉嘆二絶（七絶。二首）

灯光如豆暗消魂 灯光 豆の如く 暗かに消魂す
细雨江南黄葉村 细雨 江南 黄葉の村
夢裏不知身是客 夢の裏 身は客なるを知らず
喃喃独自祝長恩 喃喃として 独り自ら長恩を祝ふ

「嘆」は、叫ぶこと。ここは叫び詠む、と言う意味。「暗」は、
人知れず、の意味。「消魂」は、物事に深く感じて魂が抜けたよ
うな状態になること。ここは、たとえようもない寂しさに襲われ
た、と言う意味。「客」は、他郷にある者のこと。「夢裏不知身是
客」は、故郷のことを夢に見れば自分が他郷たる南京にいること
を忘れてしまふ、と言う意味。「喃喃」は、ブツブツつぶやくこ
と。「長恩」は、書物を司る神の名。大晦日に祭ると紙魚や鼠害
が生じないと言う。魯迅兄弟は前年の大晦日の十二月三十日に、
書神である長恩を祭り騒体詩「祭書神文」を作つてこれに献げて
いる。今年に独りで書神を祝うと詠っているが、実際は同じ南京
にいる兄魯迅と二人で祭つたのであろう。

韻字は、魂、村、恩、韻は元韻（上平）。

東浦醇醪玳瑁卮 東浦の醇醪 玳瑁の卮
家庭団飲夜闌時 家庭団飲す 夜闌の時
今年度歲殊寥落 今年の度歲 殊に寥落なり
一盞孤灯兩首詩 一盞 孤灯 兩首の詩

「東浦」は、紹興府城郊外の地名（会稽県）。陶成章、陳士英、蔡元培の出身地。紹興酒の本場として知られる。「醇醪」は、濃い純粹な酒、美酒。「玳瑁」は、鼈甲。「卮」は、盃。「團飲」は、集まって飲食すること。「度歲」は、歳を越すこと。「寥落」は、人が少なく物寂しいこと。「盞」は、小さな盃。

韻字は、卮、時、詩、韻は支韻（上平）。

いずれの詩にも、兄の魯迅はいるものの母親魯太太や弟周建人たちの家族と離れて異郷で正月を迎える寂しさがよく表われている。周作人が他郷で正月を迎えるのはこの時が始めてであり、それだけに家族と離れて正月を迎える寂しさはひとかたならぬものであったに違いない。「情」の人、周作人の人柄が忍ばれる詩ではある。

訳 隣家の爆竹の音を聞くに まるで故郷にいるような感があり
酔っ払って絶句を二首叫び詠んだ

豆のように小さいともしびの下で喩えようもない寂しさに襲われた

ここ江南の村里の木々の葉は黄色く色づき こぬか雨が降りしきる

夢に故郷を見れば 自分が他郷にある身であることを忘れてしまふ

今年は独り寂しくブツブツ呟いて書神たる長恩を祝うことになった

東浦の美酒に 鼈甲の盃
一家集って 飲食 闌の時

今年の年越し格別寂しき
一盃と孤灯に 二首の詩

翌光緒二十八年（一九〇二）一月十二日、同日の『周作人日記』によれば、この日魯迅は水師学堂の周作人の許を訪れ、同年二月に陸師学堂の俞明震校長に伴われて日本に留学することになり、帰郷することになったと告げた。周作人は兄の日本留学と帰郷の話を聞き「呆然自失」となり、「夜、心が安まらず、不満が募り、ともしびの下で長兄の旅立ちを送る絶句を三十首詠んだ。十一時によくやくベッドに入ったが、転輾として眠られず、夜半になってよくやく眠りについた」（この絶句は残っていない）。

魯迅が渡日した後の三月十九日、南京に独り残された周作人は五律「暮春客居感懷」（「暮春に客居して感懷す」）を詠み、三月二十二日の日記に書き誌している。

⑮ 暮春客居感懷（五律）

転眼春将老 眼を転ずる間に 春将に老いんとす
 餘靡半就残 餘靡 半ば残に就く
 炊煙凝薄暮 炊煙凝る 薄暮
 細雨湿輕寒 細雨湿り 輕寒なり
 花事經過易 花の事 經過し易し
 韶光欲駐難 韶光 駐めんと欲するも難し
 落紅飛不住 落紅 飛びて住まず
 惆悵倚欄干 惆悵として 欄干に倚る

「暮春」は、晩春三月のこと。「客居」は、他郷に住むこと。「感懷」は、心に感じ思うこと。「転眼」は、瞬く間に、の意味。「老」は、衰えること。「餘暉」は、「茶暉」(前出)に同じ。「就残」は、崩れ壊れること。「炊煙」は、炊事の煙。「凝」は、留まる、滞る。「薄暮」は、夕暮れ。「輕寒」は、薄ら寒いこと。「経過」は、物事の移り行くこと。「韶光」は、春の長閑な景色。「落紅」は、散り落ちる赤い花。「住」は、止む、の意味。「惆悵」は、悲しみ嘆くこと。韻字は、残、寒、難、干、韻は寒韻(上平)。

訳 暮春に他郷に住んでの感懷

瞬く間に春が過ぎようとしている
 除塵の花は 半分ほど散っている
 暮れつ方 炊事の煙が滞っている
 小雨降り 湿気を帯び 薄ら寒し
 花の事は 余りにうつろいやすし
 赤い花が 頻りに舞い散り落ちる
 悲しみ傷んで 欄干に靠れかかる

この年の九月十七日、周作人は母方の従兄弟で年上の友人であった魯延孫が亡くなったことを知らせる家信を受け取った。魯延孫は周作人兄弟の母親、魯太の兄弟魯怡堂の息子佩紳のこと(延孫は字。別字を帶湖と言う)。享年二十七歳。「午後、十日付けの家信を受け取り、延孫が亡くなったことを知った。ひたすら驚愕するばかりである。男の子に死なれるのは、もともと大変悲しいことである。余は、彼に老母がおり、年若くして男の子がないことを悲しむ。将

来のことを思うと、特に憂慮に堪えない。それに、彼の名が村里の外で知られることなく、二十歳余りの青年がなんと草木同様に朽ち果てたことも傷ましい。そこで、やむにやまれず聯を作って哀悼の意を表する「挽魯延孫聯」(「魯延孫を挽ふ聯」)。対が好くないため送らずに、ここに保存して少しく哀悼の意を表することにする(「周作人日記」)。

⑬ 挽魯延孫聯

長吉有母 長吉に母有り
 伯道無兒 伯道に見無し
 飲恨吞声 恨みを飲み声を吞む
 問天不語 天に問へども語らず

黄土永埋 黄土に永に埋まる
 青年靈負 青年 靈を負へり
 賚志没地 志を賚ち地に没す
 握手何言 手を握るも何をか言はん

「長吉」は、晩唐の鬼才詩人李賀の字。弱冠二十七歳で母親を残して死去。「伯道」は、晋の鄧攸の字。蒙求の標題に「伯道無兒」がある。これは、鄧攸が乱賊に遭遇した際、自分の一人息子を捨てて、弟の息子を守って義を立てたものの、後に跡継ぎが無くて祀りが絶えたと言う故事。「飲恨」は、心中に恨みを抱くこと。「吞声」は、忍び哭くこと。「賚」は、賚の俗字で、持つ、抱く、と言う意味。「賚志」で、死後まで志を持ち続けること。「握手何言」は、延

孫の手を握ったとしても延孫はすでに亡くなっており、何も言いはしない、と言う意味。

聯も創作詩の一種であり、本稿では詩として取り扱う。

訳 魯延孫を弔う聯

かの長吉に母親あり

かの伯道に息子なし

心中に恨みを抱いて忍び哭く

天に問うたが答えてくれない

冥土に永遠に埋まる

青年は命数を失った

死後まで志を持ち続けて地に没した

手を握っても 何も言ってくれない

南京で西洋の進化論等の新しい思想、学問に触れた周作人は、この年の十一月、科挙の受験とそのため勉強を放棄し、同月十六日の日記に次のように書き誌している。

午後、論策を作るに、文章を作る頭の働きが鈍く、半日に一字も書けず。食事の後にようやく百字余りデタラメに書き上げ、倉卒として書き終えた。ただ予は大変嬉しい。このことは予の改良の発端であり、また進歩の証でもあるからである。今は正しく、過去は誤りであり、私はすでに深く自ら懺悔している。予の八股尊神と絶交することの意味は以上である。

翌十一月十七日、「周作人日記」によれば、「夜、詩一卷を読んで七時に就寝し、枕に依りかかって詩を一章口ずさんだ。題はなく、第一句の頭の二字を取って名付けることにし、そこで「焚書」と名付けた。」当日の日記にその「焚書」(「書を焚く」)詩が誌されている。

⑰ 焚書(七律)

焚書未盡秦皇死 書を焚くこと未だ尽きずして 秦皇死す

復壁猶存哲士悲 復壁に 猶存す 哲士の悲しみ

降世惟知珍腐鼠 世に降りて 惟 珍しき腐鼠を知る

窮経畢竟負須臾 窮経 畢竟 須臾に負く

文章自古無真理 文章 古より真理無し

典籍於今多丐詞 典籍 今に於ても丐詞多し

学界茫茫誰革命 学界茫茫として 誰か革命せん

「焚書」は、秦の始皇帝が命じて詩書六経を焼き払わせた史実。「秦皇」は、秦の始皇帝のこと。「復壁」は、儒学者が書籍を守るために設けた二重の壁のこと。「哲士」は、道理に明るく知恵の優れた人。ここは孔子などの初期の「原始儒家」のこと。周作人は、宋代に朱子が完成させた儒教(孔教) に対して一貫して反対し続ける一方、「原始儒家」に対して高い評価を与え続けた。「降世」は、神仏が生を享けて人間界に生まれ出ること。「腐鼠」は、腐った鼠、転じて軽く卑しいものの喩え。後世の儒学者のこと。「窮経」は、経籍を究めること。「畢竟」は、結局のところ、の意味。「須臾」は、頸髭と肩、ここは頸髭を蓄え肩を伸ばした儒学者を言う。「丐詞」

は、求め願う言葉、と言う意味。「茫茫」は、漠として掴みどころのないこと。

韻字は、死、悲、樂、詞、韻は支韻（上平）。

本詩は、科挙の受験とそのため学問の放棄を高らかに宣言した作品である。

周作人は「焚書」詩を引いた後に更に次のように書き誌して、古い学問を批判している。

現代の人は経書と史書を拱壁〔両手で抱えるほどの大きな玉〕同様に重んじているが、このことは余にとつて極めて不可解なことである。他の書については具に論ぜず、四書五經について言うことにすると、その神經を損ないすり減らした例は枚挙に暇がない。それに四書五經は專制の法であり、暴君が木偶人を作るための手段であり、真に痛恨の極みである。その出鱈目な言葉について言うと、名学家の言う「巧詞」（求め願う言葉）と並称することができ、それでも「巧詞」はそのごく一部でしか過ぎない。余は嘗て、秦の始皇帝が再び出現して誤った論を否定してくれないことを残念に思ったことがある。志を同じくする者も余の考えを認めてくれていて、常軌を逸していると責められる筋合いではないが、たとえ常軌を逸していると責められても、余は甘受するつもりである。

訳

書物を焼き尽くさないうちに 秦の始皇帝は亡くなった
二重の壁に 今も猶 眞の儒家の悲しみが籠もっている

神仏が人間界に生まれ出て 珍しい卑しきものを知った
経籍の研究は 結局の所 かの亜流儒学者には叶わない

さて、翌光緒二十九年（一九〇三）二月二十八日、周作人は魯迅が三年前に作った「別諸弟」三首の韻を用いて再び詩を詠んだ（詩を一章作った。合わせて三首で、余の兄が諸弟との別れに際して詠んだ詩の韻を踏んだ。古人は詩に和するただ韻に限り、同じ韻字は用いない。余はこれに倣ってこの詩を作り、ここに書き誌することにする）〔同日付け「周作人日記」による〕。詩題は「春日坐雨有懷予季并東豫才大兄」（春日に雨に坐して予の季を懐ふ有り并はせて豫才大兄に東す）。ちなみに、ほぼ二年前に作った「送夏劍生往白」（前出）は同じ韻字を用いている。

⑩ 春日坐雨有懷予季并東豫才大兄（七絶。三首）

杜鵑声裏雨如絲 杜鵑の聲の裏 雨絲の如し
春意闌珊薄暮時 春意 闌珊なり 薄暮の時
客裏懷人倍惆悵 客裏に人を懐ひ 惆悵倍す
一枝棠棣寄相思 一枝の棠棣 相思を寄さん

「予季」は、私の季弟（末弟）、つまり三男の樟寿（周建人）のこと。「東」は、手紙。「豫才」は、魯迅の字。「大兄」は、長兄のこと。「春意」は、長閑な気分。「闌珊」は、盛りが過ぎて衰えていること。「薄暮」は、夕暮れ。「客裏」は、旅にある間、旅行中の意味。「懷」は、思いやる、思い巡らすこと。「人」は、樟寿を指す。「惆悵」は、悲しみ嘆くこと。「倍」は、増す、と言う意味。「棠棣」

は、庭梅(うすら梅)のこと。常棣の異名。庭梅の花は幾つも集まって美しく咲くので、兄弟または兄弟が相和するのに喩える(「詩經」「小雅」「棠棣」篇に基づく)。「棠棣之華」も兄弟のことを言う。「相思」は、この場合相手(樟寿)を慕い思うこと。

韻字は、絲、時、思、韻は支韻は(上平)。

錦城雖樂未為家 錦城は樂しと雖も 未だ家為らず

楚尾吳頭莫漫誇 楚尾 吳頭 漫誇する莫れ

煙柳白門寒食近 煙柳の白門 寒食近し

故園冷落雀梅花 故園冷落す 雀梅花

「錦城」は、美しい町と言う意味であり、ここは周作人のいる南京のこと。「家」は、故郷(紹興)にある自分の家のこと。「楚尾吳頭」は南京の位置を示す語。南京は、楚(湖北、湖南両省の異称)の尾に当たる所、吳(江蘇省の異称)の頭に当たる所に位置している。「漫誇」は、むやみに誇ること。「煙柳」は、霧や靄に煙る柳のこと。「白門」は、古くは江蘇省江寧県のこと。のち金陵(南京)を白門と言う。ここは南京のこと。前出の「白」、「白下」に同じ。「寒食」は、節氣名で、清明節(墓参りの日。三月初)の前々日。この日は疾風甚雨のある節氣として、この日から三日間火を焚くことを禁じ、予め作っておいた食べ物を食す。「寒食」から清明節、すでに亡き四弟樟寿の墓参りが連想される。「故園」は、古い庭、転じて故郷、祖国の意味。ここは南京との対比で、故郷紹興のこと。「冷落」は、もの寂しい、寂れる、と言う意味。「雀梅」は、前出の庭梅の異称。この第二首の後に「雀梅は棠棣のこと。俗名を郁李と言う。陸璣の『草本疏』に見える」と言う自註が施されている。

韻字は、家、誇、花、韻は麻韻(下平)。
以上の第一首と第二首は、遙か遠く故郷紹興にいる樟寿を懐かしんで詠んだものである。

通天楓樹春田社 通天の楓樹 春田社

滿地桜花小石川 滿地の桜花 小石川

勝迹何時容欣賞 勝迹 何れの時か 欣賞を容れらる

拳杯同醉晚風前 杯を挙げ 同じく酔はん 晚風の前

「通天」は、天に通じるほど高く伸びていること。「春田社」は、不詳。田は或いは日の読み誤りか。いずれにせよ、承句の「小石川」が固有名詞であるところから、これも固有名詞と推察される。識者の御教示をお願いしたい。「滿地」は、地面一杯に、の意味。「小石川」は、魯迅が留学していた東京の一地名。「勝迹」は、名高い古迹。「容」は、許す、聞き入れる。この句の主語は周作人である。「拳杯」は、杯を挙げて酒を飲むこと。「同醉」は、一緒に酒に酔うこと。飲む相手は魯迅。「晚風」は、夕方の風のこと。韻字は、川、前、韻は先韻(下平)。

この第三首が、詩題に言う魯迅に宛てた手紙である。

訳 春日の雨降る時に坐して予の季弟を思い 合わせて長兄の豫才に手紙を寄せる

小隼雨がそほ降り 杜鵑がしきりに鳴いている
暮れ方となり 春の長閑な気分もはや薄れた
他郷にて遠き人を思い 悲しみがいよいよ募る

兄弟の和合を表わす棠棣の枝に 思いを寄せる

錦城は楽しい町だが 故郷の家には叶わないぞ
楚尾吳頭にあるからといって むやみに誇るな
白門の柳が霧に煙っており 寒食も間近である
雀梅の花が咲く故郷は もの寂しいことだろう

春田社の楓の樹は 天まで届くほどに高く伸び
小石川の桜の花は 地面一杯に散り落ちて
何時になったら 名高い古迹を賞でられるのか
夕方吹く風を受けて 一緒に酒を飲みましよう

周作人がこの「春日坐雨有懷予季并東豫才大兄」詩を詠んだ翌年の光緒三十年（一九〇四）の初頭に、朝鮮の支配権を巡って日本とロシアとの間にいわゆる日露戦争が勃発した。この戦争の間、中国は朝鮮の宗主国であったにも拘わらず全く圏外にあった。周作人は、同年元旦の日記（標題は「元旦の雨」。同年の日記は「甲辰日記」と言う）に「この日、日露がすでに戦い、黄海の戦雲が日々に急を告げていることを聞いた。然るに、我が同種「漢民族」は頑なに夢を見たまま夢から醒めず（種が合わさって族となる）、さながら死んで久しい人の如くである。しかも彼らは年賀に奔走し、新年を喜ぶことに暇がない。私には彼らがどうして新年を喜び賀するのの道理解できない」と記して、自国の命運がかかっているにも拘わらず、日露戦争にいっかな関心を持たずに年賀に奔走している自民族（漢民族）を痛烈に批判している。

こうした思いを込めて周作人が詠んだのが、同年四月に発行され

た「女子世界」（上海小説林社。婦女の自立と女権の拡張を唱え、婦女も国難に当たる責務を負わなければならないと主張した）第五期に載った七律「偶感」二首（「文苑 因花集」欄）である。

⑬ 偶感（七律。二首） 会稽女子吳萍雲

迅急風潮催大夢	迅急なる風潮	大夢を催す
主人沈醉兩昏昏	主人沈酔して	兩つ昏昏なり
三千年代文明國	三千年代	文明の國
百万同胞孟密魂	百万同胞	孟密の魂
黃禍徒伝風鶴警	黃禍徒に伝ふ	風鶴の警
黑奴猶是帝王孫	黑奴	猶是れ帝王の孫のごとし
淒涼詭史興亡史	淒涼として読み尽くす	興亡史
東亜名邦有幾存	東亜の名邦	幾つ存し有らん

「吳萍雲」は、周作人の早期の筆名の一つ。女名。清末時、婦女の自立と女権の拡張を求める男子の間に、女名に仮託して作品を投稿することが流行した。吳は周作人の遊学の地江蘇省を中心とする地域の古名。「萍雲」は、あてもなく漂う雲、と言う意味。「迅急」は、社会時勢の変遷の急激なこと。「風潮」は、時勢の流れ、紛争。「催」は、促す、せき立てる、と言う意味。「大夢」は、長い間の夢。転じて、道に迷い者はいつも夢の中にあるようなものであることから、迷える人生に喩える。ここは前者。「主人」は、漢民族のこと。「沈酔」は、酒に酔いつぶれること。「兩」は、清朝の実権を握っていた西太后と当時の皇帝光緒帝のこと（日本とロシアではない）。「昏昏」は、ものがわからず愚かなこと。「孟」は、正気でなく愚か

なこと。「密」は、静かで安らかなこと。「黃禍」は、欧米に於ける黄色人種の勃興を恐れる考え。最初に提唱したのはバクーニンで、日清戦争後にドイツ皇帝ウィルヘルム二世によって広められた。「風鶴警」は、風声鶴涙に同じ。風の音や鶴の啼き声を聞いても敵兵と違って恐がること、意気が阻喪して怖じけついたりした者が僅かの音に驚き騒ぐこと、臆病神に襲われること。「黒徒」は、黒人奴隸のこと。「帝王孫」は、漢民族の祖黄帝の子孫、つまり清末当時の漢民族のこと。「淒涼」は、もの寂しいこと。「東亜名邦」は、東アジアの名高い国、インド等。

韻字は、昏、魂、孫、存、韻は元韻（上平）。

亡國遺民劇可哀 亡國の遺民 劇だ哀れむ可し
蘇門銅狄尽塵埃 蘇門の銅狄 塵埃を尽くす
不堪故国歌黍黍 故国の黍を歌ふに堪へず
莫向昆明話劫灰 昆明に向ひて劫灰を話する莫れ
大地山河如夢裏 大地 山河 夢の裏の如し
王孫芳草遍天涯 王孫 芳草 天涯に遍し
中原不少羅蘭輩 中原に羅蘭の輩少なからず
人把神州委草萊 人 神州を把りて草萊に委ぬ

「亡國遺民」とは、漢民族のこと。「蘇門」は、江蘇省呉県にある門名。呉門とも言う。「銅狄」は、漢民族の王朝である明朝時代の蘇門に飾られた銅人のこと。「黍黍」は、稲と黍。「故国歌黍黍」で、国が滅びる、と言う意味（「十八史略」中にある、国が滅びて黍黍が生い茂ると言う話に基づく）。「昆明」は、陝西省長安県の西南にある池の名。インドに通じようとして昆明夷に妨げられた前漢

の武帝は、これを討伐するため昆明池を穿ち水上戦を習わせた。「劫灰」は、世界が焼き尽くされた後に残った余燼。ここは昆明灰（武帝が昆明池を穿った時に掘り出した灰）のこと。「如夢裏」は、天下太平の夢を見ている、と言う意味。「王孫」は、前出の帝王孫に同じ。清末当時の漢民族を指す。「芳草」は、芳香のある草花。君子の美德、美貌に喩えられる。ここは「王孫」と同じく漢民族のことを言う。「天涯」は、遠隔の地。ここは中国国内について言う。「中原」は、もともと辺境や蛮夷に対する語で、周の王畿及び漢族の諸侯の封地（今の河南と山東との西部、河北・山西の南部、陝西の西部）を言う。転じて、ここは中国、天下のこと。「羅蘭」は、フランスの小説家ロマン・ロランのこと。トルストイの思想的影響の下に出発し、人類への愛と理想主義の信念に基づいて創作や平和活動に従事した。ここは、中国の宗主权を犯そうとする日本とロシアに抗議すらしようとしない当時の「平和主義者」のこと。「把」は、くを、の意味。「神州」は、中国人が自称して言う。「草萊」は、雑草。日本とロシアのこと。

訳 偶 感

時勢の急変も何のその 却て夢は深まりぬ
主の漢族は酔い潰れ 太后と帝は狂ってる
三千年もの歴史を有する 文明国家の中国
百万の同胞たちは 余りに愚かでもの静か
実体のない黄禍に何も恐れ慄くことはない
黒人奴隸は 漢族の始祖黄帝の子孫のよう
興亡史を読み尽くして 寂しさに襲われる

東亜の名高い国は 今や殆ど残っていない

亡国の遺民というのは 実に哀れなものだ
明代の蘇門の銅人は 塵埃にまみれている
祖国が滅びて禾黍の歌を唱うのは願い下げ
かの昆明池に 滅びた国の灰の話は禁物だ
中国の大地山河は はまだ甘き夢を見ており
黄帝の子孫達は 天下に遍く満ち溢れている
中国にロマン・ロランの徒が跋跨しており
彼らは我が国を雑草どもの手に委ねている

註 ※ 引用文中の() は原註、「」は引用者註。

(1) 北京人民出版社の新版『魯迅全集』(一九八一年)の日本語訳版である学習研究社版『魯迅全集』の十『集外集拾遺補編』(一九八六年)所収「別諸弟三首」の訳注(佐藤保氏担当)(一)を参照のこと。

(2) 周作人一家が住まう覆盆橋周氏の屋敷からは北東に数百メートル行った所(観音橋「興福橋」の南側。今の人民路地籍。観音橋には周作人の父方の曾祖母戴氏の屋敷があった)にあった。

趙園は、清の乾隆年間(一七三六—一七九五)に会稽の人趙焯が建てた別荘である。趙焯の号が省園であるところから、省園とも言う。もともと二十歌の広さがあり、園中には、暗翠樓、蕙溪、聽羅橋、柳琴、荷池、月台、天香居、竹坡、廂廊、香野亭、松寿軒、梅嶼等があったと言う(以上、『中国歴史文化名城叢書・紹興』[中国建築工業出版社。一九八六年]「越中園林」による)。

(3) 「魯迅の惜花詩」(一九五一年四月二十五日付上海『亦報』。筆名十山。のち周作人著『魯迅の故家』[初版は、上海出版公司、一九

五三年三月。筆名周遐寿。魯迅研究資料の二)に収められる。第二部「園の内外」三十一「惜花詩」及び周作人著『魯迅の小説中の人物』(初版は、上海出版公司、一九五四年四月。筆名周遐寿。魯迅研究資料の二)の付録一「旧日記中の魯迅」十四「辛丑二」。

(4) 中国で最初に「惜花四律」が魯迅の作ではなく周作人の作であると指摘したのは北京魯迅博物館副研究員姚錫佩氏の「魯迅の「惜花四律」質疑」(『南開大学学報』一九八一年第四期)である。日本では樽本照雄氏の「魯迅の作品ではなかった「惜花四律」」(中国文芸研究会『中国文芸研究会会報』62[一九八六年十一月三十日])が周作人創作説を唱えた嚆矢である。

(5) 北京魯迅博物館『魯迅研究動態』一九八九年第十二期所載。
(6) 本歌の「惜花四律」を始めて紹介したのは学古の「「惜花四律」の本歌」(『魯迅研究文叢』二)、『湖南人民出版社、一九八〇年』である。

「周作人詩話 二」補遺・尤侗の「鵲鶴」詩(詞)は次の通り(尤侗撰「百末詞」一卷所収)。

聞説枯魚欲泣	聞説 枯魚 泣かんと欲す
何為北鶴来帰	何為 鶴に化して来り帰る
霓裳玉佩自清輝入	霓裳玉佩 自ら清らかにして輝き入る
肆終慚形穢	肆に終に慚に形穢る

北海已成速朽	北海 已に 速朽と成りて
南山幾見高飛	南山 幾ど高く飛ぶを見る
鲲鹏变化是耶非小	鲲鹏 変化して 是れなるは小に非ず
作逍遥游戲	逍遥と游戲を作せり